山陽新聞社長賞（小学校・最優秀賞）　高学年

新聞感想文の部

心の復興に向けて

岡山市・岡山大付属小６年　横山　未侑

「被災写真返却、今も」この記事を目にした時、私は以前に母と交わした会話を思い出していた。「もし災害などで避難しなければならなくなったら何を持って逃げる？」すると母はこう答えた。「みんなの写真」私は真っ先に食べ物とかお金とかを考えていたので、とても意外な答えだった。我が家では私が生まれた時から、毎年、お誕生日には写真スタジオへ行き写真を撮ることにしている。一年、一年と成長していく姿と家族写真は今では何冊ものアルバムとなっている。このアルバムは子供達の成長であり、家族が頑張って生きてきた証だから、私にとって宝物であり、何よりの財産であると、母は教えてくれた。写真にはそれほど意味があり、すごい力があるんだと、その時、私は思った。

東日本大震災から二年九ケ月。復興も進んではいるが、まだまだ完全に復興したとは程遠い状況だ。これからも復興に向けて、少しずつ日常生活を取り戻し、一生懸命頑張って生きていかなければならない。家を失い、家族を失い、それでも前に向かって進んでいかなければならない。それには、どれ程の強い意志と、頑張ろうとする前向きな気持ち、そして心の支えが必要となることか。心を立て直していく為の原動力、まさに心の復興が必要な時になってきているのではないだろうか。この記事に書かれている被災写真の返却事業は、一見すると復興にはあまり関係のないことのように思えるかもしれない。写真を傷つけないよう、水の中でそっと汚れを落とす地道な作業、そしてその写真をわずかな手がかりで持ち主へと返却していく、本当に時間と根気が必要な作業だ。これほど大変な作業を経て、失ったと思っていた大切な写真が自分の手元に戻ってきた時の被災者の方の笑顔が目に浮かび、私まで笑顔になった。私の母の様に家族の写真を宝物、財産と思い大切にしている人がたくさんいたはずだ。過ぎた時間は、取り戻せないし、亡くなった人に会うことはできない。しかし写真の中でなら、変わらぬ昔の風景がある。そして家族の笑顔にも会うことができる。大切な思い出を取り戻し、笑顔を思い出し、一歩前に進もう、と大きな心の支えとなることはまちがいない。

被災写真返却、こんなに大変な作業をしてくださっている方々がいることを私は初めて知った。そして、思い出の写真の一枚も、なくなって失ってしまった被災者の方々の深い悲しみや苦悩を知った。震災のことを決して忘れず、被災地の方々がどんな思いで、何を求め必要としているか、何が自分にできるかということを考えなければならないと思った。

今年も我が家は、家族そろって写真が撮れたことを幸せに思い、日々の何気ない当たり前に感謝しながら生きていきたいと思った。

東日本大震災２年９ヵ月

心の復興担う

被災写真返却 今も

宮城県東松島市のがれき処理場では地震発生時刻の午後２時46分、作業にあたる人たちが分別を中断し、犠牲者に黙とうをささげた＝11日

東日本大震災の発生から11日で2年9カ月を迎えた。がれきの中から見つかった写真を洗い、持ち主へ返す作業が今も続く。一枚でも多く―。被災者の大切な思い出を取り戻したい一心で、懸命に励む人たちがいる。

「娘の写真、一枚もなかったんです」。11月下旬、岩手県大船渡市の事務所で今野陽子さん(27)は握りられたアルバムを手に思わず声を上げた。今は遠方で暮らす長女(3)が約2年前に初めて誕生日に撮影した鮮やかな姿など、懐かしい写真が52枚もあった。

震災直後は写真どころではなかった。しかし1980年のチリ地震津波で自宅を流され、思い出の品を失った経験から、娘の写真だけは捜してあげたいと思い始めていた。「こんなに見つかったんだ」と驚く今野さんに、市社会福祉協議会の及川富士子さん(49)は「まだ諦めちゃだめ」と優しく声を掛けた。

社協の臨時職員7人がボランティアと協力して洗浄した写真は約7265枚(10日現在)。傷つけないよう、水の中でそっと汚れを落とす地道な作業だ。約9割、返却率が高い理由の写真だけは捜してあげたいもない。写っている人物や風景に心当たりがある人からの情報を頼りに、被災者を訪ね歩くしかない。「一つ一つの小さな情報が貴重なんです」という刈谷ひとみさん(60)のノートには、写真の人物の親族関係や住んでいた地名などの手掛かりがびっしり書かれていた。

「最後の一枚までやり遂げたい」。及川さんとさらに力を込めた。

岩手県陸前高田市の返却施設でも、多くの写真が持ち主との再会を待つ。今年8月、埼玉県川口市から帰省した会社員福岡佳代子さん(32)は、中学校の同窓会前に初めて立ち寄り、同級生もある写真の中から亡くなった級生を見つけた。「『ここにいるよ』と言われている気がした」

避難中の人にも見てもらおうと、11月には内陸部の北上市に出張するなど取り組みを進めている。

ただ、こうして写真の返却事業に力を入れる自治体は限りつつある。多くは膨大な復興事業に人材や資金を割かれ、見つかった写真を集積にし正しく入れ、洗浄や持ち主捜索の手間暇に苦しんだりしている。

それでも、大船渡市社協職員の佐藤厚子さん(40)は資金集めにこだわり続ける。原動力は、ある被災者にもらったこんな言葉だ。「あなたは心の復興を担っているんです」

2013年12月12日付　山陽新聞

寸評　新聞が伝えた被災写真返却事業から、被災した家族の心情を思いやり、かけがえのない自分の家族への愛情をかみしめています。自らの言葉で素直な文章がつづられ、読み応えのある感想文です。